

第 7 回 市民参加懇談会コアメンバー会議  
- 市民参加による政策検討会議 -  
議事録

1. 日 時：平成 15 年 1 月 21 日（火） 15：00～17：10
2. 場 所：中央合同庁舎第 4 号館 6 階 共用 643 会議室
3. 出席者：木元座長（原子力委員）、碧海委員、井上委員、小川委員、小沢委員、  
加藤委員、中村委員、松田委員、吉岡委員  
（原子力委員会）竹内委員  
（内 閣 府）大熊政策統括官、榊原参事官、渡辺補佐、犬塚補佐
4. 議 題：（ 1 ）「市民参加懇談会 in 東京」（第 2 回）の開催結果について  
（ 2 ）「市民参加懇談会」の開催について  
（ 3 ）その他
5. 配布資料  
資料市懇第 7-1 号 「市民参加懇談会 in 東京」（第 2 回）の概要  
「市民参加懇談会 in 東京」（第 2 回）アンケート結果  
「市民参加懇談会 in 東京」（第 2 回）議事録  
資料市懇第 7-2 号 次回の市民参加懇談会の開催計画について（検討用ペーパー）  
資料市懇第 7-3 号 原子力政策の策定プロセスにおける市民参加の全体イメージ  
資料市懇第 7-4 号 第 6 回市民参加懇談会コアメンバー会議議事録

6. 審議事項

最初に、事務局より屋山委員の辞任について報告。

（木元座長）

- ・ 市民参加懇談会の活動が活発になるにつれ、コアメンバーの皆さんも大変になってくる。コアメンバーの増員について、今後検討したい。

（ 1 ）「市民参加懇談会 in 東京」（第 2 回）の開催結果について  
事務局より、資料市懇第 7-1 号について説明。

（木元座長）

- ・ アンケート結果の 2 ページ目にあるように、市民参加懇談会の活動について「大いに期待している」「期待している」を合わせた数字は大きく、うれしいと同時に責任は重いと感じた。
- ・ 参加した専門委員から感想をいただきたい。

（中村委員）

- ・ 司会者としても満足度は高かった印象を持っている。テーマの設定が、コアメンバー会議で大分練ったということもあってタイムリーだった。座長から今般の東京電力の点検作業不正記載について全体の流れを報告し、保安院、東京電力出席のもとで、有識者のパネルディスカッションに入って、という構成的にもうまくいったと思う。
- ・ かなり冷静に区分けして、時系列で追って、ポイントは何なのかというのを精査し

ていかないと、分かりにくい部分のある問題だった。特に、点検記録の不正記載の部分と密閉容器の漏洩問題ということが出てきて、その重要度の問題といったことが、時間の流れとともに指摘できたという意味では、まさに知りたい情報を提供できたのではないかと。自画自賛できると思う。

- ・ パネルディスカッションの一部には、かなり鋭い発言もあった。それに対して保安院、特に東京電力が真摯に答え、会場の皆さんもストレートに聞いたのがよかったと思う。
- ・ 第2部の方は、司会の碧海委員と井上委員の努力が、手づくりの市民参加懇談会という雰囲気を出していた。
- ・ いろいろな受け取り方はあると思うが、全体構成は、コアメンバー会議でいろいろなご意見を集約して開催した結果としては、自分では満足できるところにやっと来たかなという印象を持った。
- ・ 第2部にたっぷり時間をとれたというのがかなり良かった。アンケートでも批判があるように、コアメンバーの発言はもう少し少なくてよかった。

(碧海委員)

- ・ 第2部に限って言うと、司会として絞られたテーマに引き戻そうということに相当必死だったが、充実感があった。
- ・ 懇談会が終わった後で、参加していた人から感想を聞いた。関係者の参加者は、ほとんど意見も言わないから、もう少し非関係者が参加してくれないと困ると思った。関係者の参加人数は少し絞ってもいいという感じがした。司会をしていると、明らかに関係者と思われる方がたくさん座っているのが分かるが、その方たちが全然発言しないから、冒頭で一生懸命立場とか仕事を忘れて発言してくれと言った。しかし、やはり発言しない。ごく一般の女性とか青年の発言は、中身がすごく大層なことを言っているわけではなく、当然のことを言っているのだが、ほっとした気分になる。ああいう発言がもっともっと重なったらいいなと思った。
- ・ 他方で、常連になってしまっている方の発言は、少し気になった。つまり、常連になってしまうと、参加して発言することが1つの喜びになるということがあると思う。あるテーマに絞って意見を言うということに対する配慮が少なくなってくるということを少し感じた。
- ・ 私たちは、1人が長くしゃべるのではなくて、対等にみんなで議論するということになれていないのだ、ということをもだまだ感じる。

(井上委員)

- ・ 初めてでどうなるか、全く見当がつかなくてスタートしたが、2時間があっという間だった。私は、いつも1つのテーマで議論するとき、できるだけフラットなフロアで議論することで、「わかる、わかる」という感じの納得とか、「それはちょっと」という感じの非常に素直な気持ちが出てくると思っている。それが今回、後半には会場に少しずつ出てきたような気がしたので、参加してよかったと思う。
- ・ 非常にタイムリーで、非常に深刻な問題に対して、若い人が本当に素直に良い発言をしたことで、これが一般化していく、という議論の雰囲気をつくり出し得たという気はした。このことを、暮らしとか、今の日本の社会という目線で多くの方たちと話をするということの契機になったら嬉しいし、そこに参加できたことがよかつ

たと大変ありがたく思っている。

(小川委員)

- ・ プログラム自体は、あれは1つのパターンだが、関わり方として理想形に近いと思った。今回で市民参加懇談会は3回目だが、目指すところに近づいてきている気がする。100%完璧というのは、いつまでたってもできないと思うが、少しでも皆さんの意見を多く取り入れたい。アンケート結果で皆さんの満足度が高くなっているということは、私たちのそれなりの努力、事前にいろいろと心を砕いた結果ではないかと思うので、正当正に評価されてもいいと思う。
- ・ 第2部の碧海さんと井上さんのたたずまいが非常に親しみが持てるお母さんという感じでとてもよかった。有名な偉い方が司会だったら言い出しにくい雰囲気になるところ、お二人の人間性で会場を和らげてくれたと思う。
- ・ 発言者が、少しプロフェッショナル化しているというか、発言内容が非常に難しかった部分があった。かなり勉強している方が、満を持して来場されてるという感じがした。したがって、フロアマイクを持つ係が会場にいて、司会が「その方に聞いてみてくださいか」という振り方も良いと思う。手を挙げないが意見を持っているだろうなというのは、表情で分かる。そういう方の発言をソフトに誘導するのが良いと思う。自分では発言しようとは考えていなかったが、機会があったので発言したという方の意見も聞きたい。

(木元座長)

- ・ その場合、原則としては立ちマイクも必要だし、フロアマイクもスタンバイする必要がある。

(碧海委員)

- ・ 今回は、マイクを独占されたら困るという気持ちがあって、意識的にその方法を使わなかったのか。その場の雰囲気では、フロアマイクでも良かったという気がした。

(中村委員)

- ・ 会場からしつこく聞き出そうとするという雰囲気になるとまた良くない。そういうところが難しい。だんだんお互いに慣れというか、段階を踏むことが必要だ。まずは、とにかく発言したい方に優先的に発言させる場、というのが必要であり、そこまでは何とかできてきたが、さらに、「私もそう思います」の一言や、「いや、私は反対です」の一言を聞きながら、全体の会場の雰囲気をまとめていくというのは次の段階である。フロアマイクの使用には賛成だが、オペレーション上のテクニカルな難しさがある。それは、プロの司会者でも難しいことである。せっかく出てきた手づくりの雰囲気の中で、そういったことが少しずつできるようになっていくのが望ましい。

(木元座長)

- ・ その難しさには2つの意味がある。私も何度も経験したが、ハンドマイクを渡してしまうと、次の人に回してくれず、発言を切れないということがあるというのが1つ目。もう一つは、聞き手が氏名や立場を明らかにしている場合、話し手も自分の氏名や立場を明らかにして話すのがフェアだという意見がある。スタンドマイクの場合は氏名や立場を明らかにすることを必要ということにした。最近はそういうスタイルが増えているかもしれない。

- ・ フロアマイクも必要かなという気はしているが、司会者が「あの方が何かご意見ありそうだからちょっと聞いていただけ？」という程度で、あくまでも、司会者がマイクを握っているという感じの方が良いと思う。今後も検討したい。

(吉岡委員)

- ・ 私はコアメンバーとして参加したが、あまり発言しないように自制したつもりである。そのおかげで、終わってから住田先生に随分おとなしかったねと言われたほどである。私は「それがこの場所での務めですから、パネリストに呼ばれたら違うことをやりました」と答えた。概して、コアメンバーはそんなに話はしなかったように思う。良かった点があるとすれば、議論を誘導するようなところがそれほどなかった、流れに任せた、という点であり、それが満足度に反映していると思った。
- ・ 私が割と良い会だったと思うのは、全体の雰囲気善玉悪玉論ではなかったからである。電力会社も気の毒な面があるというようなこと、例えばそういう認識に立って、どこをどう改めれば良いのかという改善の方策を探そうという論旨につながるような議論が比較的多かったように思う。
- ・ 他方で、時間がなかったせいか、改革の手がかりとなる論点はそれなりに出たが、それを討論によって深めていくということまでには行かなかった。論点は出たが、それを並べて今回はそれでおしまいという感じになった。あれだけの人数がいて深め合っていくというのは、それこそ極めて困難なことだと思う。
- ・ 例えば、内部申告者の保護について、終わりごろにパネリストの清水氏から議論があったが、ああいうものをもう少し深めるとか、いろいろ種になるものはあった。それを将来につなげていくには、その都度御破算方式ではなくて、そこで出た論点をできるだけ継承して次の会合に持っていくということが、効果的だと思う。その際には、参加者が変わってしまうことを考慮して、次回の参加者の方にはそういう流れを簡単に紹介した上で引き継いでもらうといった形があり得ると思った。
- ・ 市民参加懇談会が始まって2年が過ぎようとしているが、そろそろ何か提言みたいなものを出していかなくてはいけないと思うので、そういう建設的な改革案を拾い上げるというような形で、この会の論点というのを継承、発展させていくのがよろしいのではないかと思う。

(竹内原子力委員)

- ・ 私は、この市民参加懇談会もコアメンバー会議もほとんど全部通して出席している。一言で言うと、今回の懇談会が一番良かった。パネリストの3人の感性が非常によく、切り口がかなり違ったのが、第2部の盛会につながった。また、説明者の方が非常に素直に話した。これが観客を非常に素直に引きつけたと思う。私自身は、市民参加懇談会を3回通して聞いているが、時間が経つのが最も短く感じ、ああ、もう終わりかと思った。

(2) 「市民参加懇談会」の開催について

事務局より、資料市懇第7-2号について説明。

(木元座長)

- ・ 別添2の2枚目に「核燃料サイクルのあり方に関する検討会の開催概要」があるが、第3回は本日開催されたので、「(予定)」と記載されているのは削除していただ

きたい。この会では、宮城県の女川、北海道の泊、愛媛県の伊方、それから鹿児島  
の川内から自治体の長の方にお越しいただいてご説明いただいた。今日は本当によ  
く本音が出て、竹内原子力委員も驚いたと本音で感想を述べたほど、かなり活発だ  
った。市民というか現地の方と懇談したいということであれば、来てもらいたいと  
4人の方がそれぞれおっしゃった。原子力委員会の市民参加懇談会としてもこれか  
ら各地に行かせていただきますと申し上げた。

- ・ 次回の市民参加懇談会の開催時間について伺いたい。

(小沢委員)

- ・ 今回と同様で良いと思う。

(中村委員)

- ・ 今回は、座長の報告があった。

(木元座長)

- ・ 15分と少しかかった。

(松田委員)

- ・ でも、やはり報告は必要だと思う。

(中村委員)

- ・ テーマによると思う。

(小沢委員)

- ・ 全部で3時間位が良いと思う。

(木元座長)

- ・ では、3時間から4時間の間で、そのテーマによって、あるいはそのフォーマット  
によって考えるということが良いか。

(中村委員)

- ・ 良いと思う。ただし、開催地の問題として、今回のアンケートには出ていないが、  
地方で平日の昼間だと、女性たちは4時半には会場を出ないと帰宅して食事を作れ  
ない。これは地方へ行くと必ず言われる。したがって、終了時間を4時から4時半  
にしないと、特に女性から参加しにくいと言われる。
- ・ 5時終了だと、やはりなんだかんだで会場を出るのが5時15分とか20分になる。  
終了を4時半として逆算すると必然的に大体3時間から、長くても3時間半ぐら  
いが限度になる。

(木元座長)

- ・ 4時30分終了とすると、1時半開始で3時間。1時からにすると3時間半。

(碧海委員)

- ・ 地方の場合には、私は1時でもいいんじゃないかという気はする。東京ではちょ  
っと1時はきついかもしれないが。

(木元座長)

- ・ 開催地とテーマによって検討することとしたい。

(中村委員)

- ・ 若干、報告が必要な形だと、全体では3時間半くらい見ておいた方がいいかもし  
れない。そうすると、1時~4時半が良いかもしれない。

(木元座長)

- ・ 第1部と第2部の構成についてはいかがか。今回は全体が4時間で、それぞれ2時間ずつだった。第1部がコンパクトになったという嫌いがなきにしもあらずだが。

(中村委員)

- ・ 正味1時間35分から40分だった。

(木元座長)

- ・ 第1部のあと休憩に入って2時間になった。2部構成とすると、第1部は1時間程度というのは、アイデアとしては良いか。

(中村委員)

- ・ やはり第2部をメインにしたいので、良いと思う。

(碧海委員)

- ・ テーマ次第である。2部構成なら1時間半は要る。1時間半、2時間。

(小川委員)

- ・ パネリストが3人もいると、1時間ではまとまらないと思うので、人数を減らしてはどうか。

(木元座長)

- ・ 座長報告をなくしたらどうか。

(中村委員)

- ・ パネリストは3人で大丈夫だと思う。2人だとパネリストのバラエティーが出ない。

(小川委員)

- ・ バラエティーがでないことには賛成。その点では、3人は必要である。

(木元座長)

- ・ テーマによると思う。とても絞ったテーマにすれば違うかもしれない。

(碧海委員)

- ・ 後半の議論のために、ある程度は前半で情報提供が必要だと思う。

(中村委員)

- ・ 2部構成にするとしたら、第2部は2時間はたっぷりとりたい。確かに、発言したくて来た方もいらっしゃるかと思うが、第1部で経過の説明があった上で、バラエティーに富んだ、ユニークでそれぞれ違う切り口での3人のパネリストがいて、かなりスパスパと問題提起をした。これにより、パネリストが考えている核心というか、自分が一番大事だと思うところだとか、不満だと思うところをはっきり出せたことが、第2部の2時間にもつながっていたように思う。
- ・ 第1部は、対談という方法も将来はあるかもしれないが、とにかく何かしらの問題提起になる。これを余り小さくまとめてしまおうと考えないで、あくまでも問題提起、ポイントは何かという情報を正確に提供する、そういう目的として第1部の存在というのを割り切ってしまうこともできる。第2部でいろいろな意見が出てくるためのきっかけづくり、ベース作りという考え方をすれば、第1部を1時間でコンパクトに、とにかく問題点を洗い出すという方法も取れる。

(木元座長)

- ・ また、パネリストにもよる。

(中村委員)

- ・ もちろん、そう思う。今回もパネリストは大事だということで、大分皆さんからご

意見があったと思う。

(松田委員)

- ・ 中村委員の提案も碧海委員の提案も、的確だと思う。

(木元座長)

- ・ そうすると、次回も継続して、第1部で問題提起をして、それは1時間か1時間半になるかもしれないが、第2部では会場からのご意見を伺うということで良いか。だから、第2部は本当に台本なし。

(松田委員)

- ・ 良いと思う。

(中村委員)

- ・ 「台本」という言葉は言わない方がいい。それでは第1部に台本があったと誤解を受ける。第1部も全く台本はない。

(木元座長)

- ・ 台本がないというのは、発言者・パネリストと発言の中身を決めていないという意味で申し上げた。出演者を決めていないということ。

(中村委員)

- ・ 私はパネリストお三方のフィールドを存じ上げているので、頭の中では構成したが、台本はなかった。

(松田委員)

- ・ 私は、前回出られなかったから予習として、この資料を事前に読んだが、楽しい。やはり中村委員の貢献がかなりある。

(中村委員)

- ・ 第1部は確かに、司会をしていても面白かった。ズバズバと意見が出てきた。保安院については、アンケートを見ると若干マイナスの評価もあるようだが、東京電力が本当に真摯に説明していたし、私も発言を引っ張り出したという感じより、「本当のことを聞かせてくださいよ」という感じだった。田岡氏の意見は少し強烈だったが、「何がこうしたんでしょうね」という姿勢で、意見を伺った。だから、聞きづらいところはなかったと思う。何かいかにも弁護しているとか、いかにも善玉悪玉と吉岡先生がおっしゃったけれども そうならなかった。

(松田委員)

- ・ 一点、付け加えたい。この市民懇談会は、立ち上がるときには本当に目的が見えなかったが、2年たってみて、方向性も自信も出てきたような気がするので、これからが本番だと思う。

(中村委員)

- ・ 私もそう思う。

(木元座長)

- ・ 課題を見つけて、本当に課題の中心にある地域に行くこともあるだろうし、今回のように東京電力の不正記載という問題から全般に話を広げていくこともできる。幅広くいろいろな形でやっていきたい。

(松田委員)

- ・ まずは、足でかせいで出ていく、ということが大事だとつくづく感じる。

(木元座長)

- ・ 構成については、今のお話を中心に次回まとめることにしたい。
- ・ 開催規模は、資料7-2号で「150名～200名程度」としている。400名とか500名になると、「ちょっと皆さんのご意見を伺う」というわけにいかないのでは、この程度がよろしいと我々は考えたが、いかがか。

(松田委員)

- ・ 良いと思う。

(中村委員)

- ・ 全体の感じとして、参加していると感じられる規模は、200名程度が1つの限度かなと思う。

(木元座長)

- ・ 今回の会場が良かった点として、階段になっていたから顔が見えたという点がある。会場の床がフラットになってしまうと、見えないという欠点がある。

(碧海委員)

- ・ 出演者の方が下だったのが良い。

(小川委員)

- ・ そういう形に作ったのか。

(碧海委員)

- ・ いや、会場が階段状のホールだった。

(木元座長)

- ・ そういうところを選んだ。次回はそういう場所があるか分からないが、200名以内でいきたい。
- ・ 次に、参加者の募集の方法について伺いたい。碧海委員から先ほど発言があったが、関係者が多人数になるのは余り良くないから、関係者が余り多くなならないよう、事務局では少し気をつけたが、それでも入っているという雰囲気はあった。

(碧海委員)

- ・ 関係者は当然応募してくるわけであり、参加していただいて一向に構わないと思う。しかし、組織を代表して情報収集のために来るなら、ある程度人数を絞って参加していただきたいと思うし、そうでなければ、やはり個人として発言して欲しい。

(木元座長)

- ・ 東京電力であっても、部署の代表の人であっても、ということか。

(碧海委員)

- ・ 電力会社の社員であっても発言して欲しい。

(木元座長)

- ・ 次回は、きちんとお願いすべきことは、お願いしていきたい。

(中村委員)

- ・ 福島の方が発言したのは今回だったか。

(碧海委員)

- ・ 福島の自治体の方が発言していた。

(中村委員)

- ・ まさに、そういう姿勢で参加していただければ非常にありがたい。



- ・ 今回の募集をかけるときに、大分ここでも議論したが、とにかく皆さんが主役で皆さんが来て発言してくださいということを強く表に出した募集の仕方をしようという話をした。もちろん情報収集というか、いろいろな人のご意見を聞きたくて来る方も一向に構わないが、基本的な参加姿勢というのは、やはり自分の意見を言うことだということを、これからますます表に出して募集していった方が良い。

(木元座長)

- ・ 募集については工夫してみる。
- ・ 次に、テーマについて伺いたい。今回は、東京電力の点検作業不正記載を契機ということに絞り込んだ。7月に開催した市民参加懇談会 in 東京(第1回)は、割合広い範囲で原子力すべてを網羅した感じのテーマだったので、広範囲に渡る意見が出た。テーマは絞り込むのが適当だろうか。

(碧海委員)

- ・ その前に場所について、私は、東京電力との関係が少ないような場所を一度選定してはどうかと思う。

(木元座長)

- ・ 場所から考えることでテーマも絞れると思うので、テーマについては次回しにしたい。資料7-2号の2ページ目をご覧ください。開催日は、先ほど吉岡委員からも発言があったが、年度末にある程度まとめてみたいと思う。したがって、3月を考えている。
- ・ 開催場所としては、福島、新潟、茨城、静岡等、資料に挙げた候補があると思う。

(碧海委員)

- ・ 具体的にぜひ市民参加懇談会を開催して欲しいという地域があるなら、たとえ東京電力と関係が深い地域でも考えるべきだと思う。

(木元座長)

- ・ 開催の希望がある地域は、何件か聞いている。その中で、今一番候補として適当だと思うし、現地でも来てもらいたいという声があるのは青森。なぜ青森県かというところ、今、プルサーマル導入が停滞したことで、六ヶ所村は核燃料サイクルについてどういう将来展望ができるのかと悩んでいるところもある。核燃料サイクルの検討会というのは、先ほど資料7-2号の別添2で示したが、やはり現地へ行くと、さらに正直に、日本のエネルギー行政の中の、特に原子力、その中の核燃料サイクルをどうするかということに対しての意見はいろいろ出ると思う。

(竹内原子力委員)

- ・ 六ヶ所村では、今、1千人位の試運転体制をとっている。フランスやサイクル機構から200人単位の支援部隊が来て、試運転の体制に入っている。核燃料サイクルに対して、一般の六ヶ所の村民の方々も非常に関心が高いと思う。将来の日本のエネルギーと六ヶ所村はどのような関係があるか等、相当勉強されている方もいると思う。議論するポテンシャルの高い地域だと思う。

(小沢委員)

- ・ 質問したい。資料7-2号別添2の6枚目に、六ヶ所村の古川村長が出席した「核燃料サイクルのあり方に関する検討会(第2回)」に、「原燃のプールの水漏れ」とある。原燃の使用済燃料貯蔵プールは、今、1つ使えないと聞いている。そうすると、

他のプールは8月の半ばから満杯ではないか。

(竹内原子力委員)

- ・ 長期的には、プールの問題はもっと後で、まだ2～3か月かかると聞いている。

(小沢委員)

- ・ しかし、そのプールで冷やして運んで持っていくと聞いている。ピットも水を抜いてしまって使えず、プールも水を抜いてしまって使えない、直るか直らないか分からないという状況で、貯蔵して燃料を分断するところも全部、今使えないと聞いているが、これは問題ではないか。

(竹内原子力委員)

- ・ 全部使えないわけではないと聞いている。

(小沢委員)

- ・ ダイバーを入れて全部のプールを総点検しなければいけないし、いつから使えるか分からないと聞いていて、何か問題があるように思われる。

(竹内原子力委員)

- ・ 点検、修理等、しっかりとした工程の下で順次実施すると聞いている。

(小沢委員)

- ・ 六ヶ所村で開催するなら、そここのところも含めて議論するのか。
- ・ なぜこんなことを聞くかという、核燃料サイクルの廃棄物の問題をどうするのかというのをもう2年間、3年間議論してきて、六ヶ所村があるから大丈夫だということになったと承知している。

(竹内原子力委員)

- ・ 小沢委員のような心配をしている人も、地元にはたくさんいるだろう。

(小沢委員)

- ・ この問題は、大問題だと思う。なぜなら、六ヶ所村だけを頼りに、私は、再処理施設としては六ヶ所村があります、六ヶ所村がありますと何度も説明してきたのに、3つしかないプールのうち1つは使えなくて、1つは満タンだと聞いている。今後どうするつもりなのか。

(竹内原子力委員)

- ・ 最終的、長期的な工程は崩さないように考慮すると聞いている。

(小沢委員)

- ・ プールの水漏れは、コンクリートの継ぎ目だと聞いているので、ほかの2つのプールも同じように、やがてコンクリートのところが割れて出てくる可能性があるということになったら、パンクしてしまうのではないか。そうすると、プルサーマルは「絵に描いた餅」になるのではないかと思う。このニュースは、青森の新聞でしか私は知らないが、どうなのか。その討論も含めるのなら構わないが、「絵に描いた餅」で六ヶ所村に行ってしまうと、その話が出たらおかしい。

(竹内原子力委員)

- ・ その討論を含めて良いと思う。

(小沢委員)

- ・ では、市民参加懇談会でその問題を扱うのか。

(木元座長)

- ・ 扱う。この問題に詳しい方もたくさんいる。

(小沢委員)

- ・ では、核燃料の問題をテーマにするか。

(竹内原子力委員)

- ・ プールの問題だけでは物足りないだろう。

(木元座長)

- ・ 核燃料サイクルの中の問題の1つである。だから、核燃料サイクルそのものをやるかやらないかという問題もある。

(小沢委員)

- ・ そのとおり。全体の問題を知らないままでは、良くない。プールの水漏れだけが問題ではない。

(竹内原子力委員)

- ・ しかし、今回の市民参加懇談会が良かったのは、説明者がいたところである。

(木元座長)

- ・ それが良かったのだと思う。当事者が出るということ。今の議論の方向で次回の市民参加懇談会を開催するとしたら、原燃の方に当事者として出席してほしいと思う。

(碧海委員)

- ・ 私は、青森でも良いが、一般の青森県民が本当に何を考えているのだろうかというところが知りたい。余りに問題の中心地に行ってしまうと、結局この懇談会が、そういう情報を持っている人たちばかりの話し合いのようになってしまうんじゃないかという気がしている。したがって、青森以外で、例えば川内とか玄海とか静岡の浜岡とか。浜岡は、ある意味では最も歴史が古いから、地元には安心して信頼してずっと支持してきた人たちもいる。そういうところで本当にどうなっているのか、知りたい気がする。

(小沢委員)

- ・ 原因を突き詰めていって誰が加害者だ、と追求しては、もう間に合わない時代になっていると思う。だから、問題があるならあったところへ行って、率直に問題を解明して、それにお金が幾らかかって誰が出して、どう対処したら良いかというようなことを積極的に言っていた方が良いと思う。消費地で原発についての話や、停電があるかないかといった話をすると、「だってしょうがないじゃないの」というような話になってしまうと思う。

(碧海委員)

- ・ それなら、例えば学生等の若い世代を集めるとか、要するに、青森県民でもあまりそういう意識をしていない人たちの参加を求めるのが良い。

(木元座長)

- ・ 資料7-2には、「青森県(六ヶ所村、青森市)」と書いた。六ヶ所村はあまりにもイシュー(issue)があるところだから、そこでやるよりも、碧海委員が言ったように、同じ青森でも少し距離を置いてはいるが自分達の県の問題だという意識はある青森市でやるか。

(碧海委員)

- ・ せめて、そのくらい離れてほしいという気はする。

(中村委員)

- ・ 津軽だと、離れ過ぎだろう。ほとんど我々と変わらないぐらいの認識になると思う。

(小沢委員)

- ・ 離れたところだと、結局、空理空論になる。

(小川委員)

- ・ そう思う。予算やマンパワーの問題はあるだろうが、1泊2日で議論すれば、何かクリアになってくるような気もする。

(碧海委員)

- ・ でも、青森県も、六ヶ所村だけでいろいろな広報をやっているわけではなくて、我々の経験からすれば相当長いことかかって、県全体に対していろいろな行政のモニターを置いたりしていると思う。

(小沢委員)

- ・ かなりの費用がかかっているだろう。

(中村委員)

- ・ 平成14年度の終わりで、本来の市民参加懇談会の目的である政策提言にまで踏み込むというこれからのことを考えると、その目的を優先してテーマと場所を考えた方がいいように思う。そういう意味で、今の青森というのは非常に微妙なポジションではあるが、東京や大阪のような大消費地は、今回は外した方がいいとは思っている。
- ・ 具体的な話を聞いて、我々がこれからの原子力政策に何かしらの提言をできるベースを作りたいという前提をおくと、テーマも限られてくると思う。やはり、今なら核燃料サイクルだと思う。そして、六ヶ所村へ行くのが適当か、青森が適当なのかという筋道になると思う。

(竹内原子力委員)

- ・ 六ヶ所村の村長は、来てくれと言っている。

(小沢委員)

- ・ 資料7-2号の別添2を見ると、村長は「サイクル事業の頓挫への心配が大きい」とか、「核燃料サイクルを計画通り進めるという強いメッセージを出して欲しい」と言っているようだから、大丈夫だろう。そういう話に対して皆で議論をするというのは、良いと思う。

(木元座長)

- ・ 良いことだが、それを自分の村で、ということではなくて、原子力委員会が討議をして、原子力委員会のメッセージが欲しいということである。

(小沢委員)

- ・ それは分かるが、それでは無理ということになる。

(木元座長)

- ・ だから、その一端として、もしかしたら六ヶ所村ではなくて青森市で開催した方がいいかもしれない。その方が幅広いテーマで、青森県全体の関心を得て、ある程度の提示ができるかもしれないし、方向性ができるかもしれない。

(小沢委員)

- ・ どこでも構わない。

(木元座長)

- ・ それではテーマは核燃料サイクルで良いか。

(碧海委員)

- ・ 私は、核燃料サイクルというのは賛成である。六ヶ所で開催するのは、反対。

(竹内原子力委員)

- ・ 日本原燃は今、本社が六ヶ所に移っている。そこでこういうものを六ヶ所で開催すれば、いわゆる核燃料サイクルの中心は六ヶ所ということで、開催しやすいと思う。青森全体のことを考えると、あるいは青森市で開催するというようなことを考えたらいいのではないか。

(木元座長)

- ・ すると、青森県全体がやるとすれば、テーマは核燃料サイクルになり得るといふことか。

(竹内原子力委員)

- ・ 六ヶ所村には、良いホールもあり、会場としてちょうど良いと思う。

(吉岡委員)

- ・ 地元政治指導者や行政指導者が、メッセージを出して欲しいと言っているところに乗り込むというのは、非常に党派的な役割を懇談会が果たすということになるから、それはやり過ぎなのであって、できる限り紛争地帯は外し、かつできれば紛争的テーマはなるべく遠巻きに見るのが得策だと思う。
- ・ 例えば核燃料サイクル的なテーマはよろしいが、私のイメージとしては、例えば何でプルサーマルが滞ったのかを考えると、福島県知事が、東京電力が電源開発についての計画を凍結したことに怒ったというのが直接のきっかけであって、これはなぜ凍結したかということ、自由化を見込んでということだと思う。したがって、そういう自由化問題をどう考えるのかということも重要な副題の1つにした上で、今度の東京電力の不祥事で最大の影響を受けたのは核燃料サイクルだが、その問題と絡めつつ、なるべく紛争地帯直撃でない形で議論すればいいのではないかと思う。

(木元座長)

- ・ そうすると、例えば青森でやれば青森市という意味か。

(吉岡委員)

- ・ 青森でやるとすれば、そうである。

(木元座長)

- ・ 自由化と原子力というのがまた付随してきたが、これについてはどうだろうか。

(中村委員)

- ・ 自由化は、まだやはり市民参加懇談会で扱うテーマとしては早過ぎると思う。

(小川委員)

- ・ 自由化というのは、一般的な考え方にはなじまないというか、考えもしないというか。自分の問題でないという感じだと思う。

(中村委員)

- ・ 自由化というテーマ自体が、やはりまだ市民レベルからかなり遠いテーマである。

(小沢委員)

- ・ 原子力が遠いのに、自由化について等というのはもっと遠いテーマである。

(木元座長)

- ・ 自由化については、例えば大阪あたりを考えたい。東京電力の今回の不祥事以降、関西電力の方がずいぶん悩んでいる。だから、そういうところでやった方がいいかもしれない。

(中村委員)

- ・ 現時点では、既存電力業界にとって自由化は大問題だが、市民レベルではまだ電力のマイラインなんて誰も考えていないと思う。時期尚早である。

(吉岡委員)

- ・ 時期尚早とは必ずしも思えない。これだけ重大な問題なので、啓蒙するような意味での問題提起をすべきだと思う。近々、数年ぐらいの問題である。

(中村委員)

- ・ 啓蒙すべきという点は理解できる。

(木元座長)

- ・ 完全自由化ということになると市民が絡んでくる。そのような点が出たときに、そのテーマで絶対開催したい。

(中村委員)

- ・ 重大な問題であることは確かである。

(木元座長)

- ・ 完全自由化になったら電気が安くなると思っている人が多いが、とんでもないとも言える。

(小沢委員)

- ・ それは、電力問題だ。

(木元座長)

- ・ 原子力ではなく。自由化になったときに、では原子力はどうなるかという大命題はある。

(小川委員)

- ・ 自由化と原子力の問題は、まだまだどう動くかわからない状況で、市民の人に自由化、原子力との関わりはどうあるべきかと聞いても、考えづらいと思う。

(木元座長)

- ・ アメリカ、イギリス、ドイツ等の事例があるから、それを踏まえた上でまた出てくる問題もある。

(中村委員)

- ・ 自由化の背景にはいろいろな事情があるが、国も基本方針としては原子力発電優先という姿勢のようだから、大いにこれから関係してくるので、段々身近な問題になってくるとは思う。

(小沢委員)

- ・ 日本の原子力において、一体何が一番問題なのかということに、私たちはいつも立ち返るしかないのではないか。

(木元座長)

- ・ つまり、原点に立ち返る。

(小沢委員)

- ・ 何が問題で、そこに何があるのかということ。何かあるたびに吹き出てくるいろい

るな問題にどう対処するのか。政治 紛争は避けるというが、原子力発電所があるところに必ず紛争がある。今後も、例の候補地を公募するという話もある。

(木元座長)

- ・ 高レベル放射性廃棄物の処分地。今、「概要調査地区」を公募している。
- ・ 今、私が小沢委員に賛成なのは、常に私もそう思っているが、原子力長計がある、とか核燃料サイクルはこう決まっているんだ、という形で進めていくから問題が起きるということである。

(小沢委員)

- ・ ここで聞いていると、すいすいと何でもうまくいっているように見えるが、現実はどうじゃないと思う。

(木元座長)

- ・ そのとおり。だから、その部分で、私は検討会とか市民懇をやらなければいけないと思っている。

(碧海委員)

- ・ 裏から見れば、日本は資源がないことだけは確かだろう。そして、周辺で何か起きたら、もう途端に困ることも確かだろう。

(木元座長)

- ・ それは原子力の是非論の中で出てこなければいけない話である。

(碧海委員)

- ・ 核燃料だって原子力の問題だってすべては、私なんか考えるときにはそれしかない。だから、なぜ原子力にそんなに反対するのかと思う。

(加藤委員)

- ・ 碧海委員が言った、資源がないでしょうという、そこからスタートすることについては、専門家の間での異論も多いと私は思う。
- ・ この懇談会をどこでどうやるかということとは別のことだが、やはり先ほど吉岡委員が提起した問題は非常に大きい。この懇談会は原子力という名前が最初についているから、原子力に絞るということでは仕方がないかもしれない。しかし、本当は自由化だとか国際的なプルトニウムの扱いだとか、その需給とか環境の問題もあり、余り広げると広くなり過ぎるにしても、そういう全体の中で原子力をどう扱わないといけないのかということを考えないと、原子力の問題というのはしっかりと扱えない。
- ・ したがって、今の時点で個々の人 消費者という言い方が良いかもしれないがそんな問題に関心がないというのも頷ける。だが、そういう状況を前提にして話して良いのか、全体的なエネルギー戦略なり全体の構造の中での原子力、だからどういう条件のもとで必要だと考えていけないのか、という説明が、政府から、意図的にということも含めて、あるいは政府の行政の組織や問題も含めて、今までされていないわけである。これはこの懇談会の与えられたテーマの外の問題かもしれないが、実は私は、かなりの人がそういうことを本当はもっと説明してほしいのではないかと考えている。自由化でダイレクトに自分達が払う電力料金がどうなるかというのは、それはまだ先かもしれないが、全体の中でこうなんですよというのが分からないから、結局、個々の事故の問題で何か怪しいなと思われる。何

か怪しいというような目で見ると、全体のエネルギーの扱い方とか、そもそも原子力というのは本当に要るのかなというところまで怪しくなってしまうという事ではないかと思う。

(木元座長)

- ・ 加藤委員の言うとおりでである。だから市民参加懇談会を立ち上げた、ということをお願いしたい。第1回の市民参加懇談会は刈羽で開催した。そのときのテーマは何だったかという、日本のエネルギーはどうあったら良いか、日本の生き方はどうあったら良いかがまず最初にあった。つまり、小沢委員が先ほど言ったように、なぜ原子力なのかということ、原子力委員を初めとして国も自問しなければいけない。そうすると、今、加藤委員が言ったように、原子力委員会と言っていいかもしれないが、「もう既にこれはしっかりと決まっている。国策である。原子力をやることになっている。長計がある。だからプルサーマルもやる」ということから動かずにきた。なぜ原子力なのかということも、まったくどいようだけれども、原点からやらなければならない部分がある。それを省略してしまって、もうそれは既に言ったからこういう政策ができたのだ、という立場を取ってきたためにこじれているのだと思う。だから、市民参加懇談会を立ち上げて、そういう原点からやろうという話になって、刈羽でも 刈羽ならプルサーマルの是非という話は当然あるが、その前に刈羽の人たちは、日本のエネルギー政策をどう考えるか、さらに先に私たちの暮らしのレベルをどう設定するのか、そこから始めないところまでこないというやり方をとっている。

(竹内原子力委員)

- ・ 今、加藤委員が言ったとおりでである。それを、どうすれば広がるかということに対しては、いろいろな手法が必要だろう。

(木元座長)

- ・ 核燃料サイクルの話をするにしても、なぜ核燃料サイクルなのかは当然問われるべきであり、その中でプールの水漏れのことにも触れるかもしれない。なぜ核燃料サイクルなのか。核燃料サイクルはどこから来たか。原子力から。では、原子力はなぜ来たか。そこまでいこうと思う。

(碧海委員)

- ・ 今回の市民参加懇談会のテーマではなかったが、司会の私自身の言い方が舌足らずだったため、参加者の意見の中で「消費地の人が必要のことを言っているが、電気を使うばかりの人が何を言うか」というような意見があった。電気の生産地から一方的に電気を送ってあげていて、それをただただ使っている消費地の人間が必要を心配するなんてとんでもないという意見だと理解したが、司会をしながらも私は、いかがなものかと思った。エネルギーの需要と供給の問題というのがあって、それで原子力を考えているのだから。

(加藤委員)

- ・ 需給の問題をしっかりと議論しないと、個々の原子力発電所の安全性だけの問題になってしまうが、同じことが需給に関しても言えると思う。荒っぽく言えば、役所が作る1本の需要曲線があって、原子力発電所の建設も、プルサーマルも、すべてのものがそこからスタートしていて、全体のきちんとした説明がない。それは、道



路でも年金でもすべて同じ。では、需給とは何なのか。状況だって、どんどん変わる。つまり、そこで需給に関する心配があるということを書いてしまうと、それ自体が役所のスタートの説明を前提にするわけだから、そこも含めての説明が一番大事ではないかと思う。

(碧海委員)

- ・ いや、私が言っているのは、政府が出す需給見通しのことではない。私たちは、やはり自分の生活からエネルギーを考えるわけだから、例えば昭和20年の生活から今の生活まで、私たちはどういう変わり方をしたかということ。例えば、今の日本の家庭の電気の使い方がどういうレベルにあるのかとか、そういうこととの関係での需給を言っているのであって、一括して例えば民生用が伸び続けているとか、私はそういうことをそのまま受けとめてはいない。すなわち、需給の問題というの、生活の問題との関連でそういうことを論じない限り、最終的にはエネルギー問題なんて考えられないということ。

(井上委員)

- ・ たいへん素朴な質問だが、今、停まっている原子力発電所は13基と聞いたと思うが、停電はしていない。すごくそこが素朴に、停まってもしっかりと今、暮らしを維持する需給があるという事実、これに対してどこからも説明がないと思う。

(木元座長)

- ・ 説明しているが、届いていないのだと思う。

(中村委員)

- ・ 新聞報道もされているが、届いていない。

(木元座長)

- ・ 他電力からも融通を受けている。

(中村委員)

- ・ 石油と天然ガスである。火力に転換して。

(木元座長)

- ・ それから休んでいた火力で発電したり、そのコストが高いということも余り聞こえてこないが、高い。900億円位になると聞いた。

(竹内原子力委員)

- ・ 1800億円と聞いている。

(木元座長)

- ・ そういう情報が届いていない。これから需要が伸びたら本当にパンクするかもしれないので、今コマーシャルで、「原子力発電が停まっています。すみませんが、節電にご協力をお願いします」と言っている。

(井上委員)

- ・ その部分が暮らしのレベル、つまりあなたの家計の1割は例えばアップする、もしくは停電するかもしれないという非常に近いところで感じるような状況にはなっていない。専門家は、停電するかもしれない、何億円必要だと分かっている。でも、実感としては、それはだれかが払っているんだろうとか、どこかから融通しているんだろうとかいう程度である。

(木元座長)

- ・ 本当は東京電力が提供しているニュース番組等でコマーシャルを出すのだったら、東京電力管内に行くわけだから、「今、東京電力はこれしか発電していない。需要はこれだけあった。この部分は某電力からもらいました、ここは某電力からもらいました。ここは火力で手当てしました」と情報を出すとよい。それができていない。

(井上委員)

- ・ 私は、関西電力さんのエリアに住んでいるから、東京電力が今の状態で停電がないなら、例えば関西電力で起きても何とかなるんだと思ってしまう。そのことが政策として、需給の問題でもあろうし、政府の姿勢の問題でもあろうし、エネルギー全体の論議の出発点になればいいのになと思う。

(木元座長)

- ・ 原子力が停まったために火力を目一杯動かしている。結果として、これだけCO<sub>2</sub>が増えたという情報まで知れば、全体が見えるかもしれない。

(小沢委員)

- ・ でも、結局、それはどこから起こったのだと云ったら、東京電力自身の問題だから、お金が上がっている等と言われても困る。

(竹内原子力委員)

- ・ 東京電力は、自分で起こしたことに自分でまたその罰を受けているということだと思う。派手な広報をしないで、しっかりと答えている。

(小沢委員)

- ・ だから、それでどんなに損しても仕方がない。

(小川委員)

- ・ そのとおり。大変だ大変だと言ったって、誰のせいでそうなったのかと、一般の人たちは冷たく言うかもしれない。

(中村委員)

- ・ だから、大変だ大変だと東京電力は言わない。言えと言っても、言わない。言ったっていいのになと思うが。

(小川委員)

- ・ 言えない。言ったところで、そもそもの原因は、と問われると何も言えないのでは。

(碧海委員)

- ・ いつも思うのは、中央給電指令室を一般の人たちに見てもらいたい。本当に電気というものが分かる。結構すごいと思うはずだ。

(中村委員)

- ・ 一般の人があの系統運用を見たら、そう思うだろう。

(碧海委員)

- ・ 例えば東京電力が全国の電力の3分の1を供給しているということだって、一般の人は全く知らないと思う。

(小沢委員)

- ・ ただ、知ったからってどうにもならない。

(碧海委員)

- ・ いや、1人1人がエネルギーの問題を、少なくとも自分で考えられる状態にはなった方が良く思う。自分の快適度が上がる。

(小沢委員)

- ・ 飛行機に乗るからって、1人1人が飛行機問題を考えているというわけでもない。

(碧海委員)

- ・ いや、誰でも、飛行機とつき合うのに自分はどうかという選択をしている。もう飛行機が落ちるか落ちないかのことは考えない、とか。せめて自分で選択できる、自分の判断を得られる、そういう状態にはなった方が快適だということ。

(小沢委員)

- ・ 電力に関しては、どういうふうを選べばいいのか。

(碧海委員)

- ・ 例えば原子力に対してはどうかとか、核燃料サイクルに対してはどうかとか、そういうことだって 核燃料サイクルという言葉はどうでもいいが プルトニウムを燃やすということは一体どうなんだとか、そういうことすべてに関して、もう少し自分で考える。

(木元座長)

- ・ 自分で考える方の代表は、私は加藤さんだと思っている。構想日本だ。日本はどう生きるか、日本の形はどうあったらいいかだ。だから、絶対にポイント発言していただきたい。その発言がベースになって、「ああ、私たちはこういう日本にしたいんだ、こういう暮らし方をしたいんだ」ということが見えてきて、「ああ、自分の責任なんだ」と感じ、その中で、では食糧はどうあったらいいか、エネルギーはどうあったらいいかということになって来ると思う。
- ・ エネルギーの中に電力がある。自動車の台数は伸びているから、石油はやはり輸入するだろう、しかし、クリーンなグリーンカー、エコカーの方に移行すると、高いけれども、我慢しようということになってきた。
- ・ では電力として日常的に消費しているものはどうあったらいいか。これは私たち1人1人の、「電力供給があるから使ってしまうわ。」、あるいは「需要があるから頑張って原子力を建てるよ。」と、何か相乗効果でここまで来てしまっている。今度はそれをもう1回原点に戻って見てみようという形を、やはり提言していかなければならないだろうと思っている。部分的にプルサーマルを入れるか入れないかについては、自分の責任で自分の暮らし方等を見て元へ戻って考えたときに、電力は必要だということになったら、ではプルサーマルはどうだろうかと、やっと見えてくる。なぜ原子力かと常に問わなければならないと思う。原点から 最初から考えてみることだと思う。構想日本の加藤委員からご意見いただきたい。

(加藤委員)

- ・ 私は、1人1人が自分のこととして考えると良い、というのは、本当にそのとおりだと思う。しかし、そうであればなおさら、エネルギーというのは、毎日我々が家の中で電気を使うだけの話ではない。そのために原子力にどれだけ国が金を出しているのか、国の責任はどこまでなのか、今回の事件でも同じだと思うが、企業はこの責任を負うのかというのが明確ではなくて 私は今回の東京電力は、随分かわいそうな面もあると思う。こういうものを見てみると、私は全然原子力の専門家ではないが、例えば金融の不良債権のどこからどこまでが不良債権に該当するのかという話と、今回のどれが傷なのかという話は、ほとんど同じに見えてくる。それ

をしっかりと決めずに、それは銀行の責任だ、企業の責任だというのは、やはりかわいそうなところがある　もちろん、それだけではないが。

- ・　そういう行政の責任と企業の責任、行政が今までやってきた部分で相当な財政負担もあるわけだし、そのために六ヶ所にしても、特に相当金を出しているわけだし、1人1人のエネルギー把握だけの話ではなくて、財政負担というのはとても大きいので、今までだけでなく今後もとても大きいので、そういうことも含めて考えないといけないのだと思う。そういったこと全部が、1人1人として本当は実感できないといけないのだろうが、そこまでくると、これはなかなか大変な話だから、この委員会の検討の範囲なのか、超えているのかよくわからない。

(小沢委員)

- ・　私たちのレベルが低くて、加藤委員が話してもこの委員会では理解ができないということか。

(加藤委員)

- ・　いやいや、そういうことではない。

(竹内原子力委員)

- ・　ある程度、自分の問題として入るかどうかということか。

(加藤委員)

- ・　そのとおり。だから、そういうものについての全体像の情報というものを、いつどこで何をきっかけに議論するにしても、少し手間がかかるかもしれないが、「全体のエネルギーの中で原子力を行うのだ」、「それをエネルギーの需給ということで見るとこうだ」、「お金の面で見るとこうだ」という、それを3つぐらいのいろいろな面から見るといって　そんな簡単に言えるか分からないが、何かそんなものを最初に置いて、「そのうちのここから話しましょうか」というようにすると良いと思う。

(小沢委員)

- ・　原子力は、最初にそういうふうにして出発していないのだと思う。

(加藤委員)

- ・　私もそう思う。

(小沢委員)

- ・　全部いろいろなものを総合してこれでいこうということではなかったし、いつも話されるのは、核燃料なんというものは、いつかは片づく方策が出て、作る時は考えなかったと言われる。お金もそうだし、地方に「うん」と言わせるためにお金を使って、後でどうはね返るかも考えていないし、第一、行政が皆バラバラではないか、この問題においても。

(加藤委員)

- ・　お金だって、経済成長がどんどん続くという前提で、そのとおりになると思ってやってきたわけだ。

(小沢委員)

- ・　知れば知るほどバラバラである。こちらについてはこの人は分からない、あちらについてはあの人分からない、こちらについてはこの人が説明する、あちらについてはあの人説明する、というようなことがずっと続いてきて、今、加藤委員が言

ったようなことを、最初に原子力について言った人はいないと思う。

(松田委員)

- ・ しかし、それをしておかないと、日本のエネルギー政策が分からない。

(小沢委員)

- ・ だから今、そうして引っ張ってきたことによる後始末の時代になっているわけだ。

(松田委員)

- ・ もう一遍、やはり最初からスタートだ。

(木元座長)

- ・ そのとおり。いつも原点に戻って考えようというのはそういうことである。そうではないと、納得していただけない。

(松田委員)

- ・ 私の専門の関係から言うと、ごみ処理の問題も最初は反対運動からスタートしたが、お金の問題だとか、自分たちがどう関わればそのお金を減らすことができるかというところに論点が移ってきたので、一般廃棄物関係の問題は、今では流行のような形になってきている。

(木元座長)

- ・ 自分の問題になった。

(松田委員)

- ・ はい。したがって、そのトレーニングが終わっているので、放射性廃棄物だとか原子力についても、その応用問題として、私は今が日本の中で議論すべき出発点になっていると思う。そういう点では、吉岡委員や加藤委員の話というのはとても大事である。
- ・ 私が素朴な疑問として知りたいのは、元々ヨーロッパではいわゆるMOX燃料というのが当たり前に使われているのに、なぜ日本ではすごい反対運動になるのかということ。恐らく、そこには政策的な何か働いていたと思う。そのあたりを、私自身はもっともっと知りたい。例えば、吉岡委員が先ほど、「自由化の問題とプルトニウムを使うという話とは非常に関連があると思うので、その議論は大事ですよ」というようなことをおっしゃったように思ったが、違うか。

(吉岡委員)

- ・ 似たようなことは言ったが、自由化とプルトニウムの関係について明示的に言及したつもりはない。そのようにお聞きになったのは、言葉を補って聞かれたものだと思う。

(松田委員)

- ・ 私は、単なるお金がどうこうなる自由化の話ではなくて、原子力そのものをどう考えるかというときに、MOX燃料に関して、日本ではあんなに反対運動が起きてしまったのに対し、ヨーロッパの方ではそれほど反対運動がなかったのは、政策論の根幹のところにとっても大きなとらえ方の違いがあったのだろうと思う。

(木元座長)

- ・ 政策の出し方が違っていたと思う。碧海委員とも話したことがあるが、軽水炉を日本が原子力発電として導入したときに、これはMOXを使えるものだ、ということをもっと最初から明示しておけば問題はなかった。そこがヨーロッパと違うところだと思

う。

(中村委員)

- ・ プルサーマルという言葉を作ったからいけない。

(木元座長)

- ・ 「プルサーマル」造語である。すなわち、日本語だ。

(松田委員)

- ・ そういうことを、しっかりと国民の前に出していかないと、いつまでたっても反対運動が続いて、世界に例を見ないような反対運動が続いて、私たちはマスコミのゲームの中に取り込まれてしまっていて、本当の情報を知ることができないということになる。だから、怖がらずに話した方がいいのではないかと思う。

(竹内原子力委員)

- ・ 松田委員も苦労されているようだ。私が、日本の事情をよく知っているヨーロッパの原子力関係者から聞いたところによると、なぜ日本の一般の人はでプルサーマル反対なのかという説明に、一番困るとのことだった。

(木元座長)

- ・ ヨーロッパの方は不思議がると思う。

(竹内原子力委員)

- ・ そのとおり。ヨーロッパでは20年も前からだから。

(木元座長)

- ・ ヨーロッパでは最初から、軽水炉でMOXを利用できるということを言っているから。

(松田委員)

- ・ 恐らく、リスクはあると思う。リスクはあると思うが、ヨーロッパでは、リスクをどう考えるかという話と、やめるかやめないかという話とは、原子力の場合、全然別だということ。

(中村委員)

- ・ リスクというより技術的な違いがあると捉えている。それを、日本ではリスクとしている。

(竹内原子力委員)

- ・ 私がこの会議に遅刻したのは、原発立地地域の首長さんとお会いしていたからだが、原子炉の中でもう3分の1はプルトニウムを発電に使っているということを、首長さんも最初のころ知らなかったとおっしゃっていた。

(松田委員)

- ・ そういう言い方をされると、やはりまたこんがらがってしまう。

(竹内原子力委員)

- ・ こんがらがると話だが、そういうことを知らなかったということ。

(木元座長)

- ・ つまり、話してもどうせ分からないだろうと　そう言っは悪いかもしれないが、説明者側にそういう意識が最初からあった。

(小川委員)

- ・ プルトニウムというものを、広報の場面でも避けていたということ。

(木元座長)

- ・ 原子炉を運転していると、プルトニウムはできているという言い方を最初からすればよかった。それから逃げていた。

(小川委員)

- ・ 語弊があるかもしれないが、逃げていたというのではなく、それでなくても難しい話をもっとこんがらがってしまうから、親切から言わなかったとも言える。

(木元座長)

- ・ 逆に言うと、国民を馬鹿にしていたということにもなりえる。

(小沢委員)

- ・ 親切とは言えないのではないか。

(小川委員)

- ・ 意地悪をして言わなかったということではない、ということ。

(吉岡委員)

- ・ ヨーロッパでそれほど大規模にMOX利用がなされていると私は認識していないが、なぜヨーロッパと違って日本で特に問題になるかということ、その原因は象徴的な名前を出すと、あかつき丸にある。つまり、国際政治の問題である。私の個人的な意見では、安全問題というのはプルトニウム利用の最重要問題ではない。むしろ、国際政治の問題の方が重要である。私たち国民がエネルギーについて思いを馳せるといのは必要だが、軍事的なリンクージュとか核拡散とか、そこまで考えた上で、自分で判断をするということが必要になる。これに関しては、今が非常に大きな好機だと思う。イラクの問題とか北朝鮮、さらにアメリカが使うとかいう問題も出ているから、それも明示的に取り入れて説明をして対話するということが必要だと思う。

(木元座長)

- ・ 4時間では足りない。

(松田委員)

- ・ 私は知りたい。

(木元座長)

- ・ いや、あかつき丸の話までいってしまったら大変だ。

(中村委員)

- ・ 1回に全部を盛り込もうとしても、それは何時間やっても足りない。しっかりと分けて考えないと。

(木元座長)

- ・ そろそろ会議の終了時刻である。

(小川委員)

- ・ 次回の開催場所が決まっていない。

(木元座長)

- ・ テーマとしては、核燃料サイクルとしたい。
- ・ 開催場所については、六ヶ所村か青森市を選ぶとすると、六ヶ所村はあまりにも現地で、何か結果が欲しいが、古川村長の「うちのところに来て結論を出して欲しい」というご発言については、私は違うニュアンスで話を受け取っている。したがって、碧海委員も中村委員も言った青森市の方がベターかもしれない。

(小川委員)

- ・ やり方として、六ヶ所村なら勉強会的な情報は必要ではないかもしれない。青森市だったら、この前、木元座長が報告した一番最初の事情説明は必要だと思う。

(碧海委員)

- ・ 内容は核燃料サイクルであっても、タイトルを核燃料サイクルとすることには、私は少し抵抗がある。

(木元座長)

- ・ それは検討したい。ただ、どうしても話はそうなるだろうし、プールの話にもなるだろう。

(松田委員)

- ・ 時間を取って、六ヶ所村を現地見学したいと思う。

(碧海委員)

- ・ 松田委員は先ほどプルトニウムについて、一般の人たちにもっと情報が必要と言ったが、私は日本というのはそう簡単には変わらないだろうと思う。エネルギーの問題だけではない。食生活に関わる、食品添加物の問題、遺伝子組換え作物の問題もすべて同じだ。すなわち、他の国では簡単に進むものが日本では進まないというのは、すべてに共通している。

(小沢委員)

- ・ だから、ごみの問題も、松田委員の言うように、うまくいっているというのは、どこでうまくいっているのかと思うくらいである。

(碧海委員)

- ・ ごみは、行政が相当動いて、今は分別等をせざるを得なくなっているから。

(小沢委員)

- ・ 原子力の問題とは全く違う。

(中村委員)

- ・ 青森市か六ヶ所村かというところへ絞られてきたような感じがするが、難しいところではあるが、結局、我々がどちらから聞きたいかということで判断したらよろしいのではないと思う。何を誰から聞きたいかということ。

(木元座長)

- ・ 碧海委員がおっしゃったように、タイトルを核燃料サイクルとしないで、何か別のタイトルにするにしても、青森が、日本の中ではこれに一番関心があるし、一般の人の中で意見を言う方も多いただろう。そうすると、青森市を選択することになるが、どうだろうか。

(小沢委員)

- ・ 青森では、何度も何度も色々な会が開催されている。だから、青森でやる必要は、特にないと思う。

(木元座長)

- ・ テーマによると思う。

(竹内原子力委員)

- ・ 青森には、関心のある人はたくさんいる。青森だと、六ヶ所村にしか関心のある人がいないということは全然ない。



(中村委員)

- ・今は六ヶ所村よりむつの人の方が熱心に来るかもしれない。

(木元座長)

- ・中間貯蔵に関する意見を聞けるかもしれない。

(中村委員)

- ・そういうこれからの展開を考えたときに、非常に重要なテーマを持っている地域ではある。

(木元座長)

- ・大間はどうするのかという問題も出るかもしれない。

(碧海委員)

- ・資源エネルギーだってあるしね、風力発電。

(中村委員)

- ・やはり我々市民参加懇談会が何をキャッチしていきたいかというところに帰ると思う。難しいところだが、確かに六ヶ所村の場合だと生々しさがある気がする。地元の方たちの思いの中にも、こうしてほしい、ああしてほしいというようなことも含めた生々しさはあって、それを聞くのも大事だとは思いますが、六ヶ所の人でもむつの人でも津軽の人でもできれば来て欲しいし、弘前の人でも来て欲しい。そう考えると、やはり青森市なのかなと思う。

(木元座長)

- ・青森市という声が少し高いような気がするが。

(中村委員)

- ・やはり集まりやすいと思う。

(吉岡委員)

- ・私もそれは賛成で、六ヶ所村のように小さいコミュニティの場合だと、立場の違う両派の協力を得る必要があるというか、そういう面を十分考慮しないとイケないが、青森ぐらい大きければ、その問題はクリアできるのではないかなと思う。

(木元座長)

- ・では、これは事務局でまとめて、またファクス等でお伺いしたい。また皆様方にマル・バツ的にお願いするかもしれないので、よろしく願いする。テーマについてはいかがか。

(碧海委員)

- ・提案だが、テーマは例えば「情報」にして、サブタイトルで少し問題を挙げるという手はある。

(木元座長)

- ・「知りたい情報は届いているか」、あれは良い。では、「情報」で考えて、サブタイトルをつける方向で。

(中村委員)

- ・「情報」でいくのか、もうちょっと考えてもいいと思う。

(3)その他

事務局より、資料市懇第7-3号について説明。

(木元座長)

- ・ 頭に入れておくために、少し説明してもらった。

本日の議論を踏まえて、後日、FAX等で、次回の「市民との懇談の場」開催案を各委員にお諮りすることとした。

以 上